

くさのねフレンズ

イナバン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

八雲紫にいいように言いくるめられジャパリパークに行くことになった赤蛮奇、わかさぎ姫、今泉影狼、多々良小傘がさまざまなフレンドに会い、成長？して行く物語です。

所々原作とは違いますが基本的なあらすじは原作通りにやっています。

目次

プロローグ	ようこそジャパリパークへ！	1
1話	さばんなちほー	7
2話	じゃんぐるちほー その1	14
3話	じゃんぐるちほー その2	20
4話	こうざん	26
5話	ようかい	30
6話	つくもがみ	35

プロローグ
ようこそジャパリパーク
へ！

「IQを下げるテーマパーク？何それ？」

博麗霊夢は不思議そうに首をかしげた。

「何よその胡散臭い話」

「さあ？私も風の噂で聞いただけよ、それより霊夢これ使えると思わない？」

八雲紫がイキイキと話始めた。

「このテーマパークを使って第二次月侵攻作戦を開始するわ！」

霊夢はこいつ何言ってるんだ？と言わんばかりの顔して、

「やめとけ、やめとけ」

と某同僚みたいな事を言ってその場を立ち去った。

「もう！何よ！そのテーマパークに月の民を誘導してIQを下げてやれば征服なんて簡単なのに！」

紫は文句を言いながらこのテーマパークに偵察に行きそうな妖怪を探し始めた。

「で、私たちが選ばれた・・・と」

八雲家に招かれたのは3人の妖怪だった、今めんどくさそうに答えた赤蛮奇、

「けもの テーマパーク？ですか：私食べられたりしないかな・・・」

心配そうに呟いたわかさぎ姫、

「けもの天国・・・私みたいなのがたくさんいるところ・・・」

少し嬉しそうな今泉影狼が、

「ええ、そうよ！けものパラダイスよ！大丈夫！食べられたりしないわよ！そういう教育が行き届いたところなのよ！」

そう紫がいうと影狼、

「私・・・行ってみたいかも・・・」

そう言うと言った赤蛮奇が、

「え!?影狼!マジで!?マジで言ってるのそれ!?紫の提案だよ!絶対裏あるって!」

そう紫はこの3人には月侵攻作戦のことは伝えていないのである、あくまでこのテーマパークの調査をしてほしいとだけしか話さなかった。

「し、失礼ね、何もやましいことはないわよ、あなた達はこれからを担って行く妖怪だから異文化交流も大事だと思って、私はあなた達の事を思ってる……うう」

紫が嘘泣きを始めそれに騙されわかさぎ姫が、

「ぼつ、蛮奇ちゃん失礼だよ!紫さんは私達の事を思って……私も行きます!ぜひ行かせて下さい!」

蛮奇は呆れた表情で、

「はあ、もういい、行けばいいんだろ、なんでこんなことになってしまったのか……」

蛮奇がおれたので紫は嬉しそうに、

「そう!じゃあさつそくいつてきてね!、ジャパリパークツアー4名様ご案内!」

そういうと3人が座っていた床に穴が空いて3人は落ちていった。

「うわああああああ」

「きゃああああああ」

「ちよつとーいきなりかよー」

「ふふふいったわね、さああの子達がアホの子になって帰ってきたら実験成功よ、ふふふ楽しみだわ」

紫が不敵な笑みを浮かべながら呟いている横で八雲藍は、どうやって月の民をジャパリパークに送るつもりだろう?と考えていた。

「いた!」

「あう!」

「よつと」

わかさぎ姫と影狼は着地に失敗したが赤蛮奇は、

「蛮奇ちゃん着地うまいねー」

「まっ、さすが蛮奇ってところかな」

「着地ぐらいで褒めないで・・・でもここ本当に幻想郷じゃないね、この草原見たことないそれに心なしか暑い」

「そうね、少し喉が乾くわ」

「そうか、姫は人魚だからね。急いで水探さないと・・・」

3人が散策を始めようとした時、

「うわあああああああああ痛っ！」

「ん？こいつは・・・小傘!？」

「あいたたたた、あれ！蛮奇ちゃんそれに影狼ちゃん達も・・・紫のツアーに参加したの?」

「ま、まあそんなとこだよ」

赤蛮奇はわかさぎ姫の顔色がすぐれないようなので みんなで水のあるところを探そうとした。

「じゃあ、手分けして水のあるところを探そう、この木が目印だから私はこっち、影狼と小傘は

あっち探してきて」

「りよーかい、じゃあ姫ちよつといっってくるね」

「うん、ありがとう蛮奇ちゃん、影狼ちゃん」

ここで初めて気づいたのだが彼女達は空を飛べなくなっていた、また弾幕は出るには出るのだが本来の威力の10分の1もなかった。

「いやー、空飛べないって不便だね影狼ちゃん」

「そうね、それにしてもけもの姿が見えないわ、本当にここけもの天国なのかしら?」

「そのはずだけど・・・おかしいね・・・あつ！ 見て！あそこに大きい山があるよ！しかもなんか出てるよ！すごい！」

影狼は小傘ってこんなに幼かったっけ?と疑問に思ったが今は水を見つけることが先決だと思い余計なことは考えないことにした。

「みやみや?あなたたちみない顔だね!どこのちほーからきたの?」

「うわあああびつくりした!影狼ちゃんどうしよう」

「任せて小傘、初めましてこんにちは私は今泉影狼、幻想郷というここからずつと遠いところからきました」

「げんそーきよー?なにそれ!なにそれ!すごい!そんなの聞いたことないよ!私はサーバルキャットのサーバルだよ!影狼ちゃんは狼のフレンズかな?そつちの子は何のフレンズなの?」

「フレンズ、フレンズってなに?どうしよう・フレンズがわかんないよ〜」

「こつちの子は多々良小傘、えつと傘のフレンズよ!」

影狼もフレンズのことはよくわからなかったが妖怪のフレンズというより傘のフレンズということにしておいた方がいくらかマシだと思った。

「傘?うーん・・・ごめん!わかんないや!でも小傘ちゃん!影狼ちゃん!よろしくね!そしてようこそ!ジャパリパークへ!」

「サーバルちゃんありがとう!そうだ!私達、水を探してるのだけどどこにあるか知らない?」

影狼は話を通じそうな子と出会えて良かったと安堵した。そしてこの子はこの辺りに詳しくそうなので水場を尋ねた。

「知ってるよー!案内してあげる!ついてきてー!」

「サーバルちゃんちよつと待って私達他にも仲間がいるの、合流したいのだけどいいかしら?」

「他にもフレンズがいるのー!あつてみたーい!他の子達はどんなフレンズなの!?!」

影狼は困った、姫は魚のフレンズということにできるが蛮奇は：：ろくろ首のフレンズ?なにそれ?怖い、何か思いつかないと少なくともサーバルが蛮奇に会う前に・・・

「おーい、姫ー」

「あつ、影狼ちゃん隣の黄色い子は・・・まさか!?猫!やめて!食べないでー!私美味しくないんだからー!」

「食べないよー!」

「あはあははは、もしかしてわちきとんでもないところに来ちゃったのかな・・・」

影狼がサーバルと姫にそれぞれの事を教えるとサーバルが、

「よろしくね！姫ちゃん！お魚のフレンズ？なんだー！すごい！その足素敵な形してるね！」

わかさぎ姫は顔を赤くしながら、

「あ、ありがとう！サーバルちゃんこそその耳かわいいね！」

2人が盛り上がってるなか小傘は、

「はあ羨ましいなーわちきもあの子達となんか共通点があればなー」

「小傘ちゃん！その手に持つてるのなんなの？」

「あつ、サーバルちゃん・・・これは傘だよ。雨や雪を防げるんだ」

「なにそれ！なにそれ！すごい！本当にすごいよ！小傘ちゃん！私びっくりしたよ！」

「えつ、びっくり・・・うん満たされてる・・・」

「え？何か言った？小傘ちゃん？」

「ううん！何でもない！サーバルちゃん！これからよろしくね！」

影狼は小傘を加え3人で話始めたのを遠目に蛮奇を探した、とりあえずあの空気から察するに蛮奇が頭を取るのはまずいと判断したので蛮奇に釘を刺したいのだ。

そうこう考えていると蛮奇が向こうから来たので、

「ばんきー！ちよつとこつち来て！」

「んー何だ？あいつ？あんな慌てて」

「蛮奇ちよつといい!?あのねここに住んでる子と友達になっただけど、その子の前では絶対に頭取らないでね！」

「ええーいきなりなに!?」

「いいから！なんか純粹でなにも知らなさそうな子だから」

影狼がすごい気迫で迫ってきたので蛮奇は頷かざるを得なかった。

蛮奇も一行に合流したので改めてサーバルに彼女を紹介することにした。

「赤蛮奇だ、えつとりボンのフレンズ？だよ。よろしく」

「よろしくね！赤蛮奇ちゃん！なんかみんな変わったフレンズだね！」

「えつと影狼、何となくわかったよ……この子は純粹すぎるね……」
「蛮奇あなたの言う通りだったわね、まんまと紫にはめられたわ……
とりあえず水場に行きましょう！」

「よ……しみんな行くよ……！」

「お……（一同）」

こうして4人の妖怪と1人のフレンズの冒険が始まった。

1話

さばんなちほー

「おー！とは言ったものの、姫どうしよう？あなたその足じゃあ歩けないでしょ？いつもみたい浮けないし・・・困ったわ・・・」

影狼は本気で悩んでいた、このままだと姫をかついでこの草原を移動することになってしまうからだ。

「しようがないわね、あまり使いたくはなかったけどこうなったら奥の手を使うわ・・・はあ！」

そうわかさぎ姫が力むと尻尾の方が光だし、みるみるうちに人の足に変わっていった。

「ええ！なにそれ！なにそれ！すごい！こんなのみたことないよ！」

「私もこんなの初めてだよ！姫！こんなことできたんだ・・・なんで今までしなかったんだ・・・」

蛮奇が呆れた様子で姫に聞いた。そして姫は困ったように、「今まで隠しててごめんなさい・・・でもこれは滅多にできないの、私が凄く困ったときだけ出来る奥義なの」

と姫が困ったように言うと、蛮奇が思い出したように、「まるでどつかの爆弾みたいだな、絶望したときだけに発動するアレに似てる」

と呟くと、すかさず影狼が、

「ああ！それ私も知ってる！子鈴の貸本屋で見たわ！」

3人がはしゃいでいると、サーバルちゃんが小傘に、

「ねえねえ！小傘ちゃん！すごいよ！なんか足の形が変わったよー！」

「そうだね！わちきもあんなの初めて見たよ！」

「わたしたちもできるかな？」

小傘は少し考えて、

「できないと思うけど、サーバルちゃんはできなくても大丈夫だと思う」

「うーん、そっかあ！わかった！」

小傘はフレンズというのがなんなのかわからないがみんなサーバルちゃんみたいだといいなと期待した。

そうこうしてるうちに姫の行く準備ができたので5人は歩きはじめた。

「ガクイド、ガクイド、サバンナガクイド」

サーバルがご機嫌な様子で4人を案内していると影狼

「ところで聞き損ねてたけどサーバルちゃんここはどういうところなの？」

「ここはジャパリパークのさばんなちほーだよ！いろんなフレンズがここにいるんだー！ほらー！あそこあそこ！シマウマちゃんがいるよー！」

蛮奇と姫がよく目を凝らしたがまったく見えなかった。

「影狼、見えた？」

「ええ、見えたわよ、確かになんかいたわ」

「すごい！影狼ちゃんは、目がいいわね」

一行がしばらく歩くと崖のような場所があり、サーバルと影狼は難なく降りることができたが他3人は苦戦しながら下に降りた、特に姫は二足歩行が慣れていないせいかわかひときわ苦戦していた。

「ふう、やっと降りれたわ」

「ん？なんかあそこに変なのいるよー」

そういうと小傘が近くにいた小さな青色の物体に近づいた。

「小傘ちゃん！それはセルリアンだよ！逃げて！」

「え？え？、う、うわ」

叫びながら小傘が蛮奇の方に逃げてきた。

「ちよ、ちよつと！なんでこっちくるんだよー！」

「ごめんよー！蛮奇ちゃん！」

「みやみやみやみやみや！みや！」

サーバルが小傘と蛮奇を追っていたセルリアンの背後をとり、それについていた石のような物体を壊すとバラバラに砕けちった。

「ふう、なんなんだあいつは？」

「あれはセルリアン！とつても危険なんだよ！」
「うう、サーバルちゃんありがと今度から気をつけるよ」

道のりは長かったがようやく水場についた。

「わーい！水だー！わちきも喉乾いたよー！」

「おいしー！生き返るわー！やっぱり地上よりも水の中の方が快適よー！」

「えへへ、こんなによろこんでくれてうれしいよー！」

「影狼、ちよつときて」

蛮奇にいきなり呼ばれたので少しびっくりしたように影狼がこつちを向き近づいてきた。

「なに？蛮奇、どうしたの？」

「私達どうやったら帰れるんだ？」

「・・・このパークのことを調べ終わったらかしら・・・」

「まさかこのまま帰れないなんてことないよね？」

「たぶん・・・」

蛮奇の首筋に冷や汗が垂れた、八雲紫は私達に交流してほしい、調査してほしいと頼んできたが具体的な内容は一切言わなかった。

このパーク、見た所いろいろな地方があるようだ、一つの地方でこれだけ大きいとなると全てを調べるのにはかなりの時間がかかる。

「うう、どうしよう〜」

蛮奇は頭を抱えた。

「だあれ〜？」

その声と同時に大きな水柱がたった。

「うわあああああああ」

「きやあああああああ」

水浴びをしていたカバが姿を現した。

「あらあらサーバルに・・・だれ？」

「ええつと、わちきは多々良小傘！こつちがわかさぎ姫で、あつちの2人が赤蛮奇と今泉影狼だよ！よろしくね！」

「ええ、よろしくね私はカバよ、それにしてもサーバル随分変な子達と友達になつたわね〜」

「えへへ、このこたちとついてもとおくからきたんだって！だからサバンナちほーをあんないしてあげてたんだ〜」

2人が話しているところに蛮奇がやってきて、

「なあ、あんたこのパークのことが全部分るところ施設ってないか？」

「それなら図書館はどうかしら？たいていのことは分かると思うわよ」

カバがそう答えると蛮奇が、

「ねえサーバル、これから私達を図書館まで案内してくれない？」

蛮奇は手取り早くこの調査を終わらせて帰りたいかった。

「いいよくでもさばんちほーのでぐちまでだよ〜」

「うーん、わかったよサーバルも今の縄張りから出たくはないよね、オツケー〜そこまでよろしくね」

「うん！じゃっ！そろそろいこうか〜！」

「うん、わちきは大丈夫だよ！姫は大丈夫？」

「ええ、もう大丈夫よ！うふふ、気持ちよかったわ〜」

「みんな大丈夫そうね、ごめんねサーバルちゃん影狼が無理言つて」

「へーきだよ！たまにはこういうのもたのしーよ！じゃっ！しゅっぱ〜っ！」

「サーバル気をつけていくのよ〜！」

「うん！」

「水分はこまめにとるのよ〜！」

「はーい！」

「それから登り坂と下り坂は足をくじかないように気をつけ・・・」

「大丈夫だよ！」

「カバさんってまるでサーバルちゃんのお母さんだね」

「うーん、ちょっとぶくざつ」

「もうちょっとでゲートだよ！この平たいのが目印なんだ」

「平たいの？ああ看板か・・・」

「ええ！これ かんばん って言うの!?!」

「そうだよ、あと横になんかあるな？」

そう蛮奇がいいプラスチックの入れ物から紙を出した。

「これは・・・」

「地図かしら？」

「そうみたい・・・」

「と、言うことは人もいるのだろうか？」

「さ、さあでもいたとしても私や姫はフレレンズで誤魔化せるし、小傘はもともと人っぽいから大丈夫、蛮奇は・・・頭取らなかつたら平気だと思っわよ」

2人がひそひそ話しをしているとサーバルが驚いた表情で、

「なにこれ!?!ちほーの場所がわかるの!?!今さばんなちほーでとなりがじゃんぐるちほーだから、今ここか！」

2人は顔を見合わせ、キョトンとした表情になっていた。

「もしかして今まで気づかなかったの？」

「うん！」

「・・・ま、まあ多分観光用のやつだから日常生活には必要ないよ・・・多分・・・」

蛮奇が、ここは頭がいくつあっても足りないと思っていた時、

「きゃあああああ」

「何?!今の悲鳴!」

「向こうはゲートの方だよ！行ってみよー！」

5人がゲートに駆けつけた時、そこには巨大なセルリアンがまるでバリケードのように立ちふさがっていた。

「大きいわね、蛮奇ちゃん、影狼ちゃんどうする？」

「戦うしかないでしょ、ただ・・・」

「私らここでスペルカード使えんのか？さつきも弾幕出たけど弱かつ

たし」

「わちき行くよ！スペルカード発動！後光！からかさ驚きフラッシュ
！……嘘……出ない」

「ど！どうするの！」

影狼が狼狽し始めた。

「だ、大丈夫だよ！普通の弾幕なら出るし、えい！……出なくなっ
てる……」

「わ、私達、食べられちゃうのかしら？蛮奇ちゃん」

妖怪4人組がどうしてオロオロしてるのかわからないサーバル
だったが、そんなことよりこの巨大セルリアンをどうするかが問題
だった。

「私に任せて！みやみやみやみや！」

サーバルがセルリアンに向かって突撃して行ったが、弱点の石が見
つからないせいか攻勢にできないでいた。

「サーバルちゃん！わちきが囷になるからさつきみたいにやつつけて
！」

小傘がそういいセルリアンの側面にまわりこみ

「おーい！こつちーこつちだよ！」

「小傘！」

「あいつ！無茶しやがって！私達も援護に行くよ！姫は念のためここ
で待機して！」

「ええ、わかったわ、蛮奇ちゃん、影狼ちゃん、気をつけて」

影狼と、蛮奇が走り出すと、セルリアンの腕が伸び2人を追いかけ
た。2人は弾幕がないと自分達はここまで無力なんだと感じていた。

「あつ！あつた！みやみやみや！」

3人が囷になりセルリアンがサーバルに背後を見せたので弱点の
石を発見できた、そしてサーバルが強烈な一撃をその急所に叩き込み
セルリアンは碎け散った。

「ふう、大丈夫！小傘ちゃん達！」

「う、うん、なんとか……」

「ふう、やれやれね」

戦いを終えた時あたりはすっかり夜になっていた、そして出口の前に来た時、

「サーバル、世話になったねありがとう」

「エヘヘ、大丈夫だよ！」

「サーバルちゃん、わちき達と一緒に来ない？」

「え？」

「そうね、サーバルちゃんとっても頼りになるわ」

「そ、そうかな」

「サーバルちゃんがよければ一緒にどうぞ？」

「それじゃあ！いく！私もあなた達のこともっと知りたい！」

こうして妖怪とフレンズの奇妙な冒険が始まった。

2話

じゃんぐるちほー

その1

蛮奇達がしばらく歩いていけると明かりと看板がある休憩所のようなところについたので誰からともなく休憩しようと言い出したのでここで休憩することになった。

「すっかり暗くなったね、今日はここで野宿かな？」

蛮奇が疲れた様子でそういったが自分で言っただけ少し滑稽だった、自分は妖怪で本来夜に活動するもの、しかし幻想郷の人里のリズムに合わせていたのですっかりヒトのようになってしまった、思っていた。

「それにしても・・・首が痛い、本当に痛い」

「蛮奇、あんた何言ってるの？」

「はは、そうだよね自分でも言っただけおかしかったよ。」

蛮奇は前は堅物で私達に冗談なんて言ってくれるような仲じゃなかったがここにきてついにそういうことを言う間にまで発展したのかと思えば少し目頭が熱くなった、そしてもう一人の影狼の友達でどう見てもヘトヘトで今にも倒れそうな姫に声をかけた。

「姫は大丈夫かしら？姫？どうしたの？」

「少し足が痛い・・・これが筋肉痛かしらね？」

姫は顔はにこやかだが声は震えていた、もともと人魚に地上で歩くことをせまることじたいおかしいのだ。

「小傘は・・・寝ちゃってるわ・・・ふふあんなに気持ちよさそうに」

「うーん・・・ひじり・・・」

「私ももう寝させてもらおうわ、また明日ねみんなおやすみ」

「姫、おやすみ、ところでサーバルちゃんは元気そうね」

「うん！私夜行性だからね！」

そう言うサーバルは近くの柱で爪とぎを始めた。

「ちよつとサーバルちゃん！その柱見るからにボロいわよ！そんなことしたら・・・」

「大丈夫！夜行性だから！うわあああ！」

「機嫌に爪とぎをしてるのもつかの間、柱が倒れてしまった。」

「うわ！あぶね！」

蛮奇は紙一重で回避した。

「うわああああ！ごめんね！蛮奇ちゃん！怪我不い？」

「ああ、大丈夫だ、問題ない」

「もう！気をつけなさいよ！サーバルちゃん！あと少しで 蛮奇に……」

影狼が喋り終わる前に草むらの方から音がした、がさがさ、がさがさとこちらに向かってきている。

「な、なんだ！」

そしてそれは姿を現した、小さいが目が緑色に光っており少し不気味だった。

「まさか！地底の橋姫の子分か何かなの!？」

「いや！見た所河童の作るわけのわからないものに似てる！さてはおまえ！河童が送り込んだ刺客だろ！私のそばに近寄るなあああ！」

影狼と蛮奇はパニックのあまり素っ頓狂なことを言い始めた。

「あつ！ボス！」

サーバルがその物体に向かってそう言うのと蛮奇と影狼は顔を見合わせ、

「え、知り合いなの？」

「うん！ボスこの子達ねげんそーきよーから来たんだって！私、パークを案内してるんだー！」

サーバルが喋るのを無視してボスが蛮奇の方に近づき、

「僕はラッキービーストだよ、よろしくね」

「え、あ、はい、よろしくお願いします」

ボスが喋ったのを見てサーバルは震えながら、

「うわああああああ！喋ったああああああ！」

「え！普段そんなに喋らないの？」

「初めて声聞いたよ！なんで!?!ボスって喋れたの!?!」

サーバルが驚いているのを無視してボスは、

「キミの名前を教えて、キミは何が見たい？」

「えっと、赤蛮奇っていいいます、図書館に行きたいんだけど」

「私は今泉影狼です、よろしくねボスさん」

「わかった、図書館までのルートを検索するよ、その前にジャパリパークについて話すね。ジャパリパークは気候をもとにしていくつかの地方にわかれているよそれぞれに動物、植物が展示されているんだ、まず大きく5つの気候帯に分離、フレンズと呼ばれる生き物達で彼女らは動物やそのいぶつと・・・」

「ストップ！長くなるなら明日にしてよ、今日はもう寝たいんだ」

「わかった、おやすみ赤蛮奇」

「ああ、おやすみ、影狼とサーバルもおやすみ」

「ええ、私はもう少し起きてるわ」

「おやすみー！」

そう言うのとサーバルはボスの方に近づき、

「びつくりしたよ！ボスが喋れたなんて、初めて聞いたけど不思議な声してるんだね」

「・・・・・・・・」

「みんなボスとお話ししたいと思うよ、なんで今まで喋らなかったの？」

「・・・・・・・・」

「ねえ！なんか言ってるよ！」

「・・・・・・・・」

「ちよつと！ボスさん失礼じゃないですか！なんで無視するんですか！？」

「・・・・・・・・」

「わ、私まで無視するとは・・・もう！知らない！」

ここまで露骨な無視をされるのは初めてだった影狼、諦めずに話しかけ続けるサーバル、そして影狼が溜息一つつき蛮奇を膝枕しているうちに彼女もいつの間にか寝てしまっていた。

ここは夜のサバンナ地方、そこに2人の人影があった。

「フェネクター！こっちなのだー！」

「はいよー、まあ気楽にこうよアライさーん」

「ダメなのだ！あれは危険な奴らなのだ！いきなり手から光る玉を出して地面をえぐっていたのだ！これはパークの危機なのだー！」

「パークの危機ねー」

こうしてここでも2人の奇妙な冒険が始まった。

この日の朝はサーバルがみんなにはおはようと言って周りみんなを起こし、ボスについて説明したところから始まった。

「これがボスなのね、本当に河童のからくりに似てるわ」

興味深そう姫がボスをまじまじと見ていた。

「ボス！わちきは多々良小傘だよ！よろしくね！」

「私はわかさぎ姫です、よろしくね」

「よろしく小傘、わかさぎ姫」

「うわああああ！またしやべったよ！影狼ちゃん！」

「しやべったわ！サーバルちゃん！ボスって酷いのよ！私達には口聞いちゃいけないの！」

「これもしかして壊れてるんじゃない？」

小傘がそう言うのとボスに近づき、まるで映らないテレビを治すように叩き始めた。

「なおれー、なおれー」

「ちよつと小傘！やめなさいよ！」

「小傘ちゃん乱暴は良くないよー」

影狼とサーバルが小傘を止めに入ったときボスの目が突然光だし何かを言い始めた。

「えー、おほん！テスト、テスト、えー、テス、テス、聞こえますか？こちらサバンナ地方です」

「うわああああああ！声が変わった！余計に壊れたかな？」

「次は一体なんなのよ！」

「小傘、僕を叩くのはやめてね、それじゃあ図書館までのルートを検索するね」

そうボスが言うとお腹のあたりが光り始め、音が鳴り始めた。

「ジャパリ図書館は森林地方にあるよ、途中3つの地方を通るね、ただ

とつても距離があるから歩いていくのはおすすめでできないよ。ジャパリバスに乗って移動しよう、ここから一番近いのはアンイン橋だね」

「バスってなにかしら？ 蛮奇ちゃん知ってる？」

「そう言う姫は？」

「質問を質問で返すなあああ！ 疑問文には疑問文で答えろと学校で教わっているのか！ 私はバスってなにと聞いたんだ！」

「あつ、はいすみません、知らないです」

「おほん、こちらこそごめんなさい、少しテンション上がったちゃったわ」

蛮奇と姫が茶番をしてる横でボスが、

「バスは乗り物の一種だよジャパリバスなら広いパークをまわるのも楽ちんさ」

「なんだかすごい！ わちきバス乗って見たい！」

「バスの近くまではジャングルの中を歩く見学ルートがオススメだよ、それでいいかな？」

「蛮奇ちゃんいいと思う？」

小傘が蛮奇に少し不安げに聞いてきた。

「それでいいと思うよ、私らパークのことなんも知らないし、ボス任せるよ」

「わかった、じゃあ案内を開始するよ、案内時間は2時間ほどだよそれじゃあしゅっぱーっ」

「おー」

そして一行はジャングルの中でさまざまなフレンズにあった、サーバルに似たもの、体の大きいもの、土を食べるもの、途中でボス、サーバル、小傘がツタに絡まり助けるのに苦労したりした、しばらく歩くとジャングルを出た、しかしそこには朽ち果てた橋の残骸しかなかった。

「お、おいこれってどういうことだ・・・」

「狼狽えるんじゃないわよ蛮奇狼狽えないで、草の根妖怪は狼狽えない」

い

「あわわわわわわわ」

ボスもこの景色に驚いたのか使いものにならなくなったような音を出し始め一行は途方にくれた。

3話 じゃんぐるちほー その2

蛮奇が橋の残骸らしきものの方を見るとフレンズがいた、その子は橋の残骸を滑り台にして遊んでいた。何回も登っては滑りを繰り返しあんなにやって飽きないんだらうか?と疑問に思った。

「おーいー!」

「わーいー! たつのしー! おお! 君達も滑りにきたの? 私コツメカワウソ! 今日はいいい滑り日和だね!」

「私は赤蛮奇って言うんだよろしく...なあ、ここに橋なかったかな? 多分昔あったと思うんだけど」

「うーん、わかんない! 私がきた時はすでにこんなだったよー!」
「なるほど、ありがとう...で私達はどうする?」

相変わらずボスはフリーズしたまま、サーバルも少し不安げに影狼の方を見ている、小傘はジャングル行進が少しきつかったのか木の下で休憩している、わかさぎ姫は目を輝かせ蛮奇の方を見ている。

「わかったよ姫、向こう岸までよろしく」

「うふふ、やっと出番のようね...人間化解除! えい!」

みるみるうちに姫の足が魚の尻尾に変わった。

「やっぱり姫はこうでないかね!」

「ありがとう影狼ちゃん」

「さあボス捕まって!」

姫がボスをひよいと持ち上げた。

「あわわ、わかさぎ姫君は一体?」

「さあボス、アンイン橋まで案内して」

「君はフレンズなのかい?」

「え、えっと...そうよ! フレンズ! 魚のフレンズなの!」

「...」

「もう! また固まっちゃったわ!」

姫が少し不機嫌そうにそう言った。また姫の変身を見てカワウソが目を丸くしてこちらによってきて、

「すつごーいー! なにいまの!?! なにいまの!?!」

「えつと・・・そう！フレンズの技なのよ！」

「ええー！あんなの見たことないよ！」

「だよねカワウソ！すごいよね！」

サーバルとカワウソは姫を中心に盛り上がっていた。

「影狼、私は小傘呼んでくるよ」

そう言うのと蛮奇は小傘のいる方へ歩いていった、その間に影狼はカワウソにアンイン橋までどう行けばいいのかを聞くとジャガーと呼ばれるフレンズが泳げるから連れて行ってくれると言うことを聞いた。そのことを聞き終えた時ちようど蛮奇と小傘が歩いてきたので蛮奇に今の話しをしてみんなでジャガーが来るのを待つ事にした。

「へえ〜君達げんそーきよーからきたんだ〜」

「うん！カワウソもしかして幻想郷知ってるの!？」

「知らない」

蛮奇はカワウソと小傘の微妙に噛み合っていない話に頭が痛くなっていた。そうこうしているとジャガーらしき人影が現れた。

「おーい！ジャガーちゃん！」

「おお、今日も滑ってたのか・・・ん？そこの子達は？」

「私はサーバル！サバンナちほーからきたんだよ！で、この子達はげんそーきよーからきた蛮奇ちゃん、影狼ちゃん、わかさぎ姫ちゃん、小傘ちゃんだよ！」

「へえ〜聞いたこともないところからきたんだね〜私はジャガーよろしく、君達も乗せてほしいのかい？」

「そうなんだ、アンイン橋ってどこまで案内してほしいんだ」

「あいよ〜」

「私は泳げるから大丈夫よ、でも少し水が汚いわね」

「それは仕方ないさ、ここはそういう地方なんだ、にしてもあんな変わった足してるね〜表面がピカピカして綺麗だよ」

「ふふふこれは鱗って言うのよ」

「へえ〜私もジャングル長いけど姫みたいなのには初めて会ったよ、あ！雨だ！」

2人がわいわい話しているとジャングル特有のにわか雨が降ってきた。

「うわあああ降ってきたー!」

「はい、サーバルちゃんこれで濡れないよ」

「え、えー!ー!ー!ー!すごい!ー!ー!ー!ー!これが傘なんだね!」

「なにこれ!なにこれ!すごい!すごい!すごい!水を弾いてるよ!」

「今日はいろいろと珍しいもの見れるね」

小傘の持った傘に驚くフレンズ達、またそれによってお腹が満たされたのだろうか、小傘がご満悦な表情のなっている。

「サーバルちゃん達くそんな驚かないでよくわちきお腹いっぱいだよ」

「え!何?小傘ちゃん何か言った?」

「ふへへくなんでもないよ」

「じゃあ出発するよー」

「ええ!?雨降ってるわよ!?行くの!」

思わず影狼が声をあげたが、

「ん?このぐらい大したことないよ、すぐに止むさ」

「小傘ちよつと入れて」

「うー!ん3人はちよつときついよ」

「う!そうよね」

「ほら影狼私のマントで少しは防げるだろ?」

そう言っつて蛮奇は自分の着ていたマントを影狼の頭にかぶせた。

「蛮奇」

「まっ、これくらい雨ならこの布切れでも大丈夫だよ」

「ありがとう、でもあなたが濡れるわ」

「たまにはそういうのもいいんじゃない?」

「蛮奇ちゃんつて一見無愛想ぽいけど本当はすごい優しい子だよね、セルリアンの囷になった小傘ちゃんを放って置けなかったり、今みたいに影狼ちゃんが濡れないようにしてあげたり、私蛮奇ちゃんのいいところだんだんわかってきたよ!」

「ば、ばか!私は別にそんなつもりじゃあ...そう!お風呂だよ!お

風呂のかわりだよ!」

「ふうん」

「もう! 本当にお風呂のかわりなんだよ!」

「ふへへ 蛮奇ちゃん照れてる」

「おもしろい」

そうこうしていると雨も止んでアンイン橋に着いていた。

「着いたよ! ここがアンイン橋さ」

「……わかつてはいたが橋の残骸しかないね」

影狼が呆れた感じでそう言った。

「あ、ボスどこに行くの?」

「小傘、蛮奇ついてきて」

「うわあ!?! ボスが喋った」

「そっか、ジャガー初めてなんだね! ボスって喋れたんだよ!」

「おい、ボスどこ行くんだ?」

ボスが歩いて行った先にボロボロの車体があった。

「もしかしてこれがバス?」

「おもしろい! なにこれ!?! なにこれ!?!」

「大つきい! ボス触っていい?」

サーバルとカワウソははしゃいでいたが蛮奇はここもか、と言わんばかりの顔をしていた。

「運転席がないね」

「運転席?」

蛮奇が首をかしげるとボスが、

「本当は前にもう1つ車体があるんだ」

「それっぽいのなら前に向こう岸で見たよ」

「本当!?! ジャガー!」

ジャガーと共に向こう岸に渡ると確かにバスの車体らしき物はあったがこちらもやはりボロボロだった。またこの車体をどうやって向こう岸へ運ぶかも問題だった。サーバルは力があつたから持つことは持てるのだが泳げない、それに仮に泳げたとしてもバスの重

さで沈んでしまうだろう。

「わーい！重たいぞー」

カワウソは無邪気に騒いでいるが蛮奇達にとっては死活問題だった、彼女達はこのジャパリパークでは人間並みに無力、時々自分達が妖怪や付喪神であることを忘れるほどであった。

「ねえねえ蛮奇、あの橋の残骸利用して局所的な橋作れないかな？」

お腹が満たされたからか今日の小傘は絶好調であった。蛮奇は他に策がなかったので小傘の案にのることにし、その場に居合わせたジャガー、カワウソ、サーバルの力を借りて川に途切れ途切れではあるが橋をかけた。

「なにこれ！なにこれ！おもしろーい！」

カワウソが1人ではしゃいでるうちにサーバルが自慢のジャンプ力と怪力でバスを向こう岸までもって行ってしまった。

「サーバルちゃんすごいよ！あんな重いもの持ってジャンプできるなんて！わちきには絶対できないよ」

「えへへありがとう小傘ちゃん」

「で、バスこれで本当に動くんだよな？」

「任せて」

ボスがバスの運転席に乗り何かを始めるとバスのエンジン音がし始めたがすぐに止んだ。

「電池がないよ、あの山で充電できるんだ」

「やっぱり・・・よしじゃんけん負けたやつあの山行ってくてことで」

「ちよつと蛮奇いきなりすぎよー！」

そういうわけで蛮奇、影狼、小傘がじゃんけんすることになった。なお姫は久しぶりにはしゃいで泳いだからか、岸で寝ており起こしても起きなかった。

「じゃーんけんけーんぽん」

結果、影狼と小傘が行くことになった。

「なんで私が・・・」

「山のぼりかーたのしそー！」

影狼は自分の運の無さを嘆いていたが小傘はノリノリだった。

「まってー！私も行くー！」

「サーバルちゃんも来てくれるの？」

「うん！なんだかすつごく楽しそうだから！」

「じゃあ私はバス見とくよ」

「私達は遊んどくねー」

こうして3人はかなり険しい山を登ることになった。後々バスで
楽するために。

4話 ころござん

今泉影狼は途方に暮れていた。ボスがロープウェイで行けば山頂まで楽だと言っていたのだが、肝心のそれが無いのだ。

影狼はうすうす嫌な予感を感じていた、小傘は気合だー！根性だー！と騒いでおり、サーバルはロープウェイのひもをつたって行けばいいと言っておりそれがますます影狼の頭をいたくした。

「ねえねえ！影狼ちゃん！この崖登って行けばいいんじゃないの？」

「出来なくはないと思うけど・・・小傘は無理よね？」

「気合だー！根性だー！」

「強がらなくてもいいからはつきり言っつて」

「ごめんなさい、無理です、死んじやいます」

小傘が無理そうなので他の方法を考えていると空から、おそらくフレンズであろう物体が飛んできていきなり歌いだした。

「わくたしは〜と〜き〜仲間を〜探し〜て〜る・・・・・・」

トキが歌い終わる頃には影狼とサーバルはノックアウトされていた。小傘だけ大喜びですごく楽しそうな表情で笑っていた。

「もう！いきなりなんなのよ！」

「はじめまして私はトキ、私の歌どうだった？」

「え、えつとすごくエキサイティングだったわ」

「ち、力強いね」

「すごい！わちきあんな歌聞いたの初めて！みすちーとは違う意味で迫力あったよー！」

「うふふ、ありがとうやっぱり誰かに聞いてもらうのはいいわね」

「なんだか2人楽しそうじゃなかった」

「え？アンコールかしら？」

「え!？」

「遠慮しとくわ、そうよね？サーバルちゃん」

「う、うん、そうだね！」

しばらくトキととりとめもない話をしてから自分達が山の頂上に行く手段がないことを言った、そうするとトキが1人ぐらいなら山頂

に運べると言ったので小傘を運んでもらい影狼とサーバルは崖を登って行くことにした。

「じゃあ山頂で会おうね」

そういい小傘はトキに運ばれていった。途中ボスがトキの声が濁った声などと煽ったのでトキのモチベーションが急降下し、小傘も急降下しそうだったがなんとか山頂に辿りついた。

「ここが山頂かー、あーなんか小屋があるよ」

「あそこで充電できるよ」

「じゃあ行こボス、トキさんも行こー」

「ええ」

小屋達が小屋の中に入るとレンズが1人いた、それはアルパカのレンズでここでカフェを経営しているらしが全くお客が来ないと嘆いている、しかしそれは仕方のないこと、こんな険しい山なのに登る手段といえば崖を自力で登るかトキのように飛ぶぐらいしかないのだから自ずと行くものは限られてくる。そして何と言っても場所がわかりにくかった。こんな状況だったからか小傘達が訪れたのですごく喜んでいた。

「ふわあああーいらっしやあい！よおこそお→ジャパリカフェへく！どうぞどうぞ！ゆっぐりしてってえ！いやまつ←てたよお！やつとお客さんが来てくれたゆお！嬉しいなあ！ねえなんにいのんむう？色々あるよお、これね、紅茶って言うんだってえハ←カセにもらったんのー！ここからお湯が出るからそれを使ってにえー！」

「ねえねえここで充電できるって聞いたんだけど何か知らない？」

小傘がアルパカにそう聞くと明らかにアルパカのテンションが下がり、

「なんだあくお客さんじゃないのかく、ぺっ！」

「うわあああごめんよお！」

「ところで充電ってなんのことお？」

「この電池っていうやつなだけど・・・」

小傘がアルパカに電池を見せるとそれらしいものはめる場所が屋根の上にあるというのでついて行くとボスがこれだよといったの

で間違いなかった、そして下に降りると少し部屋が暗くなっており、充電が終わるまでお茶を作れなくなっていた。またアルパカは小傘達にこのカフェを開いた経緯とお客さんが全く来ないことを話し、なぜ来ないのかということ話を話すと小傘が、

「えっ！場所がわかりにくいからじゃない？」

と即答した、またトキも鳥系のフレンズでもない限り山の上なんて見えないといい小傘の意見を後押しした。こうして小傘、アルパカ、トキによるジャパリカフェをもっとみんなに知ってもらおう計画が始動した。

一方その頃サーバルと影狼は……

「もお無理よおおおとおお！」

「頑張つて影狼ちゃん！多分後少しだよ！ほら見て！あそこに木の枝があるよ！あれに捕まって一気に登れば！」

「もーやだ！お家帰る！お家帰りたい！ゆかりお願い！もーギブ！」

「ファイト！発だよ！影狼ちゃん！」

2人の奮闘は続くのであった……

ジャパリカフェ宣伝計画として手取り早くカフェの存在を知ってもらうにはまずアピールが必要だ、ということになりまず鳥系のフレンズにアプローチしてみるようになった。そこで以前小傘が河童が作っていたヘリコプターなるものを思い出し、ヘリポートの絵を応用してみることを考えた。そして3人で草をむしりコップの形を表現してみることを思いつき、小傘が少し高いところに登って形を確認しながら作業を続けた、またボスに除草能力があったため途中から随分捗りサーバルと影狼が死にそうな顔で頂上に着く頃には完成していた。

「2人ともお疲れ様ー」

「し、死ぬかと思ったわ、体力をつけなくっちゃあなあ」

「でも、崖登り楽しかったよ！影狼ちゃん」

「私は2度とごめんだわ」

『まあまあ〜難しい話は置いてえ〜はいどうぞお〜どうぞお〜』

『あ！紅茶だ！レミリアがよく飲んでるねー』

「そうね、この香りはダーズリンね〜」

「ほへ〜香りでお茶の種類わかるんだあ〜」

「すごーい！私、紅茶？なんて初めて飲んだよ！ねえねえ元はどんななの？」

そうサーバルが尋ねてきたのでアルパカが奥から紅茶の缶を持ってきた、そこにはくつきりとマジックペンでアールグレイと書かれていた。

「ねえ影狼・・・あれ・・・」

「小傘・・・崖の上から飛び降りると気持ちいいかしら？」

「待ってー！はやまらないで！」

影狼は顔を真っ赤にして下を向いて誰とも目を合わせなくなってしまう。

「あれー？影狼ちゃんなんで顔真っ赤なの？どこか具合悪いの？」

「サーバルちゃんほつといてあげて・・・影狼は今自分と戦ってるんだ」

「なんだかわかんないけどファイトだよ！」

サーバルが影狼を励ましているとボスがどこからともなく出てきてロープウェイの入り口まで来て欲しい、と言った。4人がボスについて行くとそこには修理されたであろう人力のゴンドラがあった。これで帰りは崖を下らなくてもよい、ただ乗る部分が小さいのでギリギリだった。3人はアルパカとトキにお礼を言って、狭いながらもなんとかゴンドラに乗り充電済みの電池を持って帰路の着いた。

しかしこの時3人は知らなかった、下でとんでもない自体になっていること・・・

5話 ようかい

サーバル、影狼、小傘の乗ったゴンドラは狭くせいぜい2人乗り用だったが1つしかなかったようなので仕方なく無理やりつめこんだ。途中空を見ていた小傘がカフェの方に飛んで行くフレレンズを見て、あの絵に気づいてくれたらいいな、思った。

「サーバルちゃん漕ぎっぱなしでしんどくない？」

「大丈夫だよ、ヘーキヘーキ、それにほらもうすぐしてに着くよ！」

サーバルの言う通り最初にトキとあった場所が見えて来た。途中落ちてしまうのではないかという不安も彼女たちにはあつたがなんとかこの状況を切り抜けた。

ふと影狼がゴンドラ乗り場の階段の下を見るとジャガーがいる、しかし様子が変だなんだかそわそわして心なしか顔色も悪いような気がする。

ゴンドラが近づいて来たのをジャガーが見るとこっちに気づいたようで乗り場に登って来た。

「やっと帰って来た！あのな、落ち着いて聞いて欲しい」

「ジャガーちゃんどうしたの？そんなに慌てて」

「あんたたちの連れの姫が倒れた……」

「え!?!どういふことよそれ！一体何が起こつたのよ!?!」

影狼がジャガーにもものすごい気迫で問い詰めたが、

「い、いや、全然わからん……あんたたちが行って少し経つたぐらいに起きて私ら4人でとりとめもない話をしていたら急に……」

「影狼、速く行った方が良くない？」

小傘が言うのよりも早く影狼は走り始め、その後を他の3人が走つた。

バスのところに着くと呼吸が荒く、ぐったりと横たわったわかさぎ姫がおり一目で尋常ではないとわかった。

影狼が大声で姫を呼び続けているがまったく反応がない、蛮奇も呆

然と立ち尽くし、

「なんで……いきなり……さつきまで全然元気だったじゃん姫……」

同じ事を何度も何度も繰り返して呟いていた。

「蛮奇……どうして？姫はどうしてこんな……」

影狼の悲痛な声に蛮奇は何も返せずに行った、その時姫の荒い呼吸が不意に止まり、体が光始めた。

「今度は一体なんなんだよ!？」

姫を包んでいた光は初めは大きかったが次第に小さくなりついには手のひらに乗るくらいになった、そして光の中から青い小さなクリスタルのようなものが溢れ落ちると同時に光は消えた。蛮奇達は一瞬すぎる出来事だったのであっけにとられていたがありのまま今見た事を話すとわかさぎ姫が青い小さなクリスタルになってしまった、それしか説明のしようがなかった、彼女達自身も何が起こったのかわからなかったと思うが、わかさぎ姫も何をされたのかわからなかっただろう。しばらく沈黙が続き最初にカワウソが、

「もしかして……死んじゃった？」

「そんなわけないだろう！私達は妖怪だぞ！死ぬなんて……」

「ご、ごめん」

蛮奇はカワウソの言った事に過剰に反応してしまい言わなくてもいい事まで言ってしまった。気づいた時にはもう遅くジャガーが「よいかい」という単語に反応してしまった。

「よいかいって何？あんたらフレンズじゃないの？」

「……影狼仕方ないよね」

「そうね……こんな事になってしまったのだからもう……」

影狼と蛮奇は諦めたようにうつむきサーバル達に幻想郷の事、自分達はフレンズではなく妖怪という種族で人に避けられてきた事、サーバル達フレンズを怖がらせないように正体を隠していた事、途中サーバル達は何度も首をかしげたがそれでも真剣な表情で最後まで聞いてくれた。

「ジャガーちゃん今の話わかった？」

「半分ぐらい……でも驚いたなく……この他にも私らみたいなのがいる

なんて・・・」

「今まで黙っててごめん・・・怖がらせたくなかったんだ・・・」

「もしここに人がいたら私達と会うと面倒な事になると思ったのよ・・・ごめんなさい」

サーバルとジャガーが少し考え込んで、

「えーい！わかんないや！わかんない！私ね今の話聞いて蛮奇ちゃん達の話聞いて全然怖いなんて思わなかったよ！むしろ自分と違うっただけでのけものにするヒトの方が怖いと思ったよ！私達はそれぞれ得意不得意な事あるでしょ？それとおんなじだよ、みんな違ってみんないいんだよ！」

「そうだな、今話を聞いても私も特には怖くなかったね、だからさもつと胸はりなよ」

「ジャガーちゃん・・・サーバルちゃん・・・」

影狼は自分でも気付かないうちに涙が出始めていた、しかし蛮奇は、

「綺麗事だよ・・・これを見ても同じ事言えんの・・・」

そういうと蛮奇は妖怪とはこういうものだといわんばかりに自身の頭を持ち上げた、持ち上げた時今までは何もなかったのに今回に限って感じた事もないような痛みがあった。

「痛っ！」

「ちよつと蛮奇！」

影狼が何か言ってるが全て無視して蛮奇は、

「所詮妖怪は誰とも分かり合えない、だから1人で生きてきた」

「蛮奇まだそんな事言ってるの!?!私達がいるじゃない!あなたは1人じゃないわよ!」

蛮奇の頭が取れたのを見て、ジャガーとサーバルは不安そうな表情になり、蛮奇はやっぱり口だけじゃん、と言いたげな表情になった、「すっごーいーいー!」

それまで明後日の方向を向いていたカワウソが声をあげた。

「はっ。」

蛮奇は思わず素っ頓狂な声をあげた。

「すつごーい！ねえねえ君！それどうやるの!?私にもできる!?ねえ教えてよー!」

「怖くないの?私こんな体なんだよ・・・」

「え!?なんで?すつごーいよ!私初めてみた!ねえねえやり方教えてよ!」

蛮奇は狼狽した、今まで怖がれることはあっても喜ばれることはただ一度たりともなかった、しかしカワウソはどうだ、目をキラキラ輝かせてこつちを見ている。

「ねえ蛮奇ちゃん」

うろたえていた蛮奇だったがサーバルの一言で我にかえった。

「何?こわい?そうでしょ・・・妖怪は怖いだよ」

「ううん、痛くない?大丈夫?無理しなくていいよ」

「そうだぞ!蛮奇!さつき痛いって言ってたじゃん!もうやめなよ!そんなに自分傷つけることないよ」

蛮奇は自分の頭を戻しその場にへたりこみ大声で泣きだした。影狼は蛮奇の近くに寄り添い泣き止むまでずっとそこにいた。

「ありがとう影狼・・・もう大丈夫だから・・・あとサーバル、ジャガー、カワウソありがとう・・・」

「どういたしまして!」

「ふふ蛮奇、もう自分を痛めつけるようなことしちやダメだぞ」

「ねえねえやり方教えてよ」

カワウソは相変わらず蛮奇の頭に興味津々でずっとやり方を聞いている、しかしジャガーにカワウソには多分できないぞといわれ少し落ち込んでいた。

「ところで小傘ちゃんも妖怪なの?」

サーバルが小傘に尋ねてきた、小傘は自分をどう説明しようか少し困った。この世界のフレンズ達にはどうやら道具の概念がないようだ、そこにあるものとして道具をスルーするのですから説明しなくてはならない。

「えっと、わちきは付喪神っていう種族なんだ」

「つくもがみ？なにそれ！なにそれ！」

サーバルが目をキラキラさせそうきいてきたとき、

「ほう、つくもがみというのかお前は……」

と茂みの中から聞こえてきた……

6話

つくもがみ

彼女には記憶がなかった、自分がどこからきてどこへ行くのか……
サバンナの平原を1日ぼうつとしてるだけの日々……

そんな彼女は見たのだ楽しげに歩いてる少女を、その子は青い
シヨートヘアでオツドアイ手には何か棒のようなものを持っていた。

普段なら気にも止めないのだが彼女はあの子が自分に似ているよ
うな気がした。

彼女は青い髪の少女に惹かれ後をつけることにした……

「こがき」それが彼女の名前らしい……私の名前は何？

彼女は自分の名前が欲しかった、小傘のようにみんなとおしゃべり
したかった。

ある時小傘が自身を付喪神といった、付喪神その響きは彼女にとっ
ととても聴き心地がよかった……

気づいたら彼女は……

「ほう、付喪神というのか、お前は……」小傘に話しかけていた。

「あなた何のフレンズ？」

サーバルが恐る恐る聞いた。

「わからない……何も覚えていない……」

目の前の少女は容姿は髪が白く服は布切れのようなものを巻いて
おり羽がついた帽子をかぶっていた。

「小傘……私も付喪神？」

「え、君も付喪神なの？」

「わからない……それを聞いている、しかしお前と私は似ているよう
な気がする」

「う、うん確かに気配は似てるような気もするけど少し違うよう
な……」

小傘は目の前の子が同族のようだったが何かが違うような感じが

したので要領を得ない回答しかできなかつた。

「名前つけて・・・小傘・・・」

「え？いきなりそんなこと言われても・・・何か特徴ないかな・・・うーん、帽子ぐらいいしかないのか・・・」

「じゃあ帽子ちゃんです！」

サーバルがあつさりと言った。

「いくら何でもそれは・・・」

「それでいいよ」

サーバルの鶴の一声で名前が決まり、その後付喪神について説明したがどうもフレンズ達には道具の概念がないのかなか理解してもらえないかなりの時間を要した。

そしてこれからの旅の目的は当初の調査の目的とは大きく異なりまずわかさぎ姫を救うことになった。

「じゃあカワウソ、ジャガー私達はもう行くよ、なんていうか：その：ありがとう・・・」

「気にすることないよ〜なんだかんだで面白かったよ、あんた達との時間」

「また遊びに来てね〜」

電池をセットしたバスに乗り込み2人に別れを告げ新たに加わった帽子とともに出発した。

「どこに行くの？」

「図書館よ、私達の仲間がねこんなになっちゃったの、助けたいんだけど方法がわからなくて・・・」

「すごく綺麗・・・なんだか寝てるみたい・・・」

姫の結晶を見ると帽子は子供のような無邪気な瞳で見入っていた。

「うーん、私ここにはそこそこいるんだけどこんなこと初めてだよ〜」

サーバルは少し不安そうにそういい、次の目的地の方を向いた。

ジャガー達と分けられてしばらく走り続けると砂漠に出た、しかしここで問題が発生した。バスが砂にはまり身動きが取れない上に前か

ら砂嵐。

「ばっ、蛮奇どうしよう！前から砂嵐が・・・」

「とりあえずみんな押せ！バスを押すんだ！」

バスに乗っていたみんながバスを押してはまってる車輪をなんとかしようとした時、

「うぎゃー！」

「いててて」

上から何か降って来てサーバルに直撃した、それと同時にバスも走れるようになった。

「サーバルちゃん大丈夫！」

「なんとか・・・あれ？この子もフレンズだね」

サーバルは落ちて来た何かがフレンズとわかったが、どうして降ってきたのかは全くわからなかった。

「うう・・・」

「とりあえずいつも連れてバスに戻ろう」

蛮奇がその子をおんぶしてバスに戻るとすぐに発進した。

バスが動いたおかげでなんとか砂嵐を回避できた一行は降ってきたフレンズ、スナネコと仲良くなり彼女の寝床に涼みに行くことになった、また彼女はサーバルのことも知っているようで彼女曰く「おっちょこちよい」らしい。

「サーバルどうしてまたこんなところに来たのー？」

「この子達を図書館まで連れて行ってあげることになったの！」

「へえー、まあ騒ぐほどでもないかー」

「おいおいさつきとテンション全然違うな」

蛮奇が呆れ気味にそういうと、

「スナネコは好奇心旺盛だけど飽きっぽいんだ」

ボスがすかさず解説をいれた。

「あなた達はどこからきたのー？見かけないフレンズだね、あつ、でもあなたは狼のフレンズね」

「ええつと・・・」

「蛮奇ちゃんに、影狼ちゃん、帽子ちゃんだよ！みんなこことは違う世界から来たんだよ！すっごいんだよ！私達の知らないことやできないことを平然とやってのけるんだ、そこに痺れる憧れるよね！」

「すっごーい！けど騒ぐほどでもないか」

「飽きるの早いよ！」

サーバルが蛮奇達に向かってうまく誤魔化したよと言わんばかりにウインクした。

「サーバル・・・ありがとう、気を使ってくれて・・・」

「ふふ、ヘーキヘーキ私達お友達でしょ！」

「なんだかわかんないけど楽しそう」

スナネコとゆるい会話をしているうちに住処に着いた。